

サロン九条 第 314 回例会 (2018. 6. 26)

テーマ 「明治 150 年を考える ～その虚と実～」

話題提供： 魚次 龍雄 さん (岐阜県歴史教育者協議会副会長) 参加者 18 名

今年は、「明治 150 年」と言われ、国の掛け声の下、岐阜県の企画でも「明治 150 年—明治の歩みをつなぐ、つたえる」として多彩な事業が生まれ、テレビでは大河ドラマ「西郷どん」が明治維新を描き出していきます。

そうした中、「私は長州の生まれで、現在も山口での生活があるものとして、長州から〈明治 150 年〉を考えてみたい」として始まった今回は、長年歴史教育を实践され、8 月に開催される〈戦争と平和 150 年展実行委員会〉共同代表でもある魚次龍雄さんからレポートいただきました。

冒頭、魚次さんは、「疑問を持って 150 年を考える」として、14 の疑問— ①【今年は明治 150 年か?】 ②【安倍首相は山口県を優遇している?】 ③【明治 150 年は、めでたいのか?】 ④【山口県内では〈明治 150 年〉で盛り上がる?】 ⑤【山口県庁には憲法はあるのか?】 ⑥【長州藩は会津藩士を徹底的に滅ぼしたか?】 ⑦【会津藩と松平容保は名君だったのか?】 ⑧【福島の〈白河踊り〉を長州に持ち帰ったのか?】 ⑨【明治以降の歴史は薩長の歴史観なのか?】 ⑩【〈西郷どん〉にみる歴史の偽造】 ⑪【薩摩藩は近代日本を目指した優れた藩か?】 ⑫【西郷はそんなに偉いのか?】 ⑬【西郷は岐阜の民衆を裏切ったのだ】 ⑭【明治 150 年で何を考えたらいいのか?】 を提示し、各々に興味深いコメントを述べられました。

中でも【薩摩藩は近代日本を目指した優れた藩か?】に対しては、関ヶ原の戦いでの西軍島津義弘の徳川軍敵中突破は、敗戦濃厚のなか、西軍を裏切り戦うことなく石田三成を見殺しにして、薩摩に逃げ帰ったとの見方があること。また、そのすぐ後に薩摩藩は関ヶ原での失地回復のために奄美諸島を占領し、琉球国を属国化して砂糖や密貿易で莫大な利益を上げ、琉球通信使を江戸に送り、薩摩の力を誇示した。江戸時代の薩摩の繁栄は、奄美・琉球の犠牲の上に成り立っていたとの解説がなされ、更には奄美支配への謝罪も琉球への武力攻撃についての謝罪も鹿児島からは行われておらず、これは日本のアジア侵略に対する謝罪がないことと同質のものであるとの指摘がありました。

また、【西郷はそんなに偉いのか?】では、同じ薩摩藩の大久保利通と並べ、大久保は岩倉使節団として欧米視察をしたことで、近代日本の方向性を作った一人として評価できる。一方、西郷は島津家に忠誠を尽くしたが、新政府では廃藩置県で薩摩藩をなくして島津久光の恩を砕いたこと。また、士族の扱いに苦慮して打ち出した征韓論が退けられた後、不平士族に担がれて西南戦争を起こしたことなどを見ると、西郷は薩摩ファーストであって日本ファーストではなく、多くの薩摩軍、政府軍の若者を死に追いやったことは、軍人、政治家として優れていると言えるかとの疑問を投げかけられました。今回、魚次さんの 8 ページに亘る資料に基づく報告は、14 の項目を歴史教育者の視点から解説され、中学・高校の歴史の範囲をはるかに超える切り口の歴史授業となりました。

参加者の意見交換では、「昨年が 150 年なのに、なぜ今年なのか。イベントの都合か」との声や、「海津の治水工事は、薩摩藩の財力低下の半面で幕府への発言力の向上があったのか」など、これまでの認識を変えるような発言がありました。また、吉田松陰の評価についても多様な意見が寄せられ、近代思想の見方にまで話が広がりました。

最後に、魚次さんは、「明治 150 年は、曾祖父からの時代で、まだ手が届くところ」であり、「明治維新は、琉球にとっては〈琉球処分〉、蝦夷地にとっては〈アイヌ弾圧〉、台湾・朝鮮にとっては、〈侵略植民地化〉のスタートであって、その歴史に謙虚に目を向け、軍事力に頼らずに世界から尊敬される平和国家を目指そうとしたのが、日本国憲法であったこと」を強調されました。そして、「戦争はそれを支える国民の熱狂がなければ成立せず、明治 150 年と言われる今、その歴史を楽しみながら、未来につながる人びとの生き方を探してみようではないですか」と締めくくられました。